

## 《WE 認証者インタビュー》 「恩返し」の気持ちで工事責任者を育成 —法規制物件の品質管理などの経験生かす—

「自らの経験を生かして若手を育成したい、という切なる思いを具体的に立案・実行できる機会を与えていただき、当社への恩返しの気持ちを込めて全力で取り組んでいる」とは、日鉄テックスエンジ（東京都千代田区）の三浦直人氏（68）。日本溶接協会が認証する WE（溶接管理技術者）は 2 級を皮切りに 1 級、そして特別級と取得。同社が 2019 年度から本格始動した「工事責任者集合教育」プロジェクトの講師として「これまで WE 認証取得とともに、法規制物件の品質管理に携わり、溶接と品質管理が一体となった様々な業務を経験したことは、講師を務める社内教育にも大いに役立っている。今後も関係者の理解をいただきながら継続していきたい」と話す。

### 日鉄テックスエンジ株式会社

機械事業本部

工事事業部 工事連携グループ

チーフマネジャー 三浦 直人 氏



### ●難関だった WE1 級試験

同社は、製鉄所をはじめ、その他鉄鋼・各種プラント設備のエンジニアリングやメンテナンスを複合分野（機械・電気・建設）で展開する。機械系製造現場において溶接技術は、加工・組立技術とともに重要な役割を担う。同社の溶接技術は、製鉄所を中心とする鉄鋼事業を通じて培ってきたものを核に、独自の計画的な育成を重ねレベルアップを図ってきた。その結果、溶接マイスターや黄綬褒章受章者など優秀な溶接技能者が社内に多数在籍し、各方面からの高い評価と信頼を得ることにつながっている。

三浦氏は現在、同社機械事業本部工事事業部工事連携グループのチーフマネジャーとして社員、協力会社を対象に工事担当者、責任者クラスのレベルアップ教育等をサポートしている。

1976 年 3 月秋田大学鉱山学部機械工学科卒業、同年 4 月太平工業（現日鉄テックスエンジ）に入社。配属された大分支店機電部機械整備課で初めて接した溶接に興味を抱いた。

「上司に『自分も溶接をやってみたい』と打ち明けると、学卒には必要ないという。ただ実際に体験しなければ分からないこともあるだろうということでねばり強くお願いして、定時後、職業訓練校の溶接初心者 2 週間コースに通わせていただき、アーク溶接の面白さ、難しさを体感した。そ

の後も溶接に接するたびに現場の皆さんにお願いして実際に溶接する機会を得たことは楽しい思い出となっている」

その後、工事担当として設備の建設や機器の製作に携わる過程で「資格を取りたい」という思いが強くなり 30 歳までに WE2 級を取得、その後すぐ 1 級取得に至る。並行して高圧ガス甲種機械、一級管工事士、UT2 級なども取得した。

現在同社の WE 認証者（2 級、1 級、特別級）の合計は約 220 人に及ぶが、三浦氏によると、当時 WE 認証への関心はそれほど高くなかったという。

「溶接自体は見様見真似でなんとかできたものの、資格となると話は異なり、理論から覚えなければならぬ。そこで WE2 級の取得を最優先に正に砂をかむようにテキストを 2 回、3 回と読み返すことで自信を得た。1 級は 2 級とは比較にならないほど大変だった。テキストを 1 回通して学ぶのに最初は 2 カ月を要したが、次は半月～1 カ月、次は 1～2 週間と、加速度的に理解度が向上していくことを感じた。社会人になって最も勉強したのが WE1 級だった。社宅に帰り毎日深夜まで机に向かったおかげで試験は手ごたえがあり、合格を確信できた」。

## ●優秀な溶接技能者は誇り

1980 年代後半の鉄鋼不況を機に、同社は鉄鋼業以外への進出を模索し、1992 年、その拠点として大分工場を開設した。大分工場を含む大分エリアの機械部門（設計、製作、工事、品質管理）は高圧ガス設備大臣認定事業所（管類）の資格認定を 1986 年に取得、1997 年には ISO 9001 を取得している。三浦氏は 1993 年から大分工場長を務めたことにより「溶接に関する『知識』が『知恵』になる有益な機会を与えられた。大分工場で作るものは、ほぼすべて客先からの厳しい製造体制（製缶・溶接）、品質基準（溶接検査）が求められる。その際、製造管理（溶接管理）と、品質管理・保証の要求に対しては、WE1 級、特別級の認証で対応した」と振り返る。

「責任者として高圧ガス保安法、電気事業法、ガス事業法等の製作・現地取付を手がけた。WE 認証取得を通じて得た知識を実際に活用することができ、客先や社内的にも信用を得ることができた。また、溶接技能者を国内外の発電所、化学プラント向けの圧力容器や高圧ガス配管の溶接工事に積極的に派遣し、他社の優秀な技能者と切磋琢磨することで、当社の溶接技能者の技術力が向上し、大分のみならず九州、全国で高い評価を得たことはうれしい限りであり、当社の誇りである」。

三浦氏が 2002 年から就任した大分支店機械部長のころは、「部員に対し WE 認証の取得は『基本中の基本資格』と呼びかけががんばってもらった」という。

こうした積み重ねの結果、溶接に関わる部門（エンジニアリング、工事、整備）が多い機械事業本部では、溶接の基礎を学ぶ良い機会として、まずは WE 認証の取得に向け勉強することが大切であると、社内でも認識されている。

「WE 認証取得に際しては、事前講習会はもちろん、取得後の報奨金制度もあり、とても良い環境を会社として整えていただいている。親会社（日本製鉄）の工事においても溶接に関して高品質な要求があり、その際には、WE 認証者による計画・実行・検査が求められている。現状では WE 認証者による溶接管理は日常的に PDCA が回るレベルになっている」。

## ●再雇用に当たり「人材育成」を担う

2018 年、三浦氏はシニア再雇用に際し、「今一番気になっている若手工事責任者の育成に関して、何かできることはないか」と考えた。時を同じくして、同社機械事業本部工事事業部において、従来

のような OJT 中心の育成では限界があり、工事責任者の体系的な教育の仕組みが必要との機運が高まり、それをバックアップするベテランに「人材育成をしてもらえないか」と声がかかった。三浦氏をはじめとするベテランは「若手を育てるのは今しかない」と熱い思いを共有して 2019 年から「人づくり」のミッションがスタートした。



**新人工事責任者集合教育で講義する三浦氏（右）**

「2004 年の工事部長のころから周囲の要望を受け工事責任者の教育に取り組んだ経験があり、全社的に実行したいとの思いは以前からあった。ただ、全社的な教育には相応の費用がかかる。また日々現場作業に当たる若手を教育の場を集めることには上司をはじめ周囲の理解も必要になる。幸いにも関係者の理解、協力を得て実行にこぎつけ、新人工事責任者の集合教育はこれまで 8 回開講している。私は工事实績管理を担当しており、そのほか安全、品質、工事方法、実技などの各ベテランが独自に教材をまとめ、入社 3 年目までに平等に知識を与え、その知識を知恵にしてもらえよう、新人工事責任者のレベルアップに取り組んでいる」。

三浦氏がかつて工場長を務めた大分工場は、溶接技術の社内教育センターの役割も担っている。溶接の資格取得に関する教育はもとより、実践における品質確保および作業の効率化に重点を置いた教育を行うことにより、社内外を通じて溶接技術の伝承と普及に貢献している。2019 年から協力会社への技術指導を含めて企画した「出前溶接研修」はこれまで 2 回行っており、「この活動も全国に広めていきたい」。

三浦氏は機械全般を通して、最もベースとなり、また、極めて身近に接することができる技術は「溶接」であり、その溶接を知る、勉強することは、機械系技術者として、最もオーソドックスで使い勝手の良い技術であると指摘する。

「新人工事責任者の集合教育の中で、WE1 級の認証取得を推奨し続けている。取ってほしい資格、取るべき資格と本音で思っている」。